

人との出会いで 音楽畑を転がって

市岡純治 (高19回)

今年、古希を迎え、今もまだ仕事を続けている。レコード会社を皮切りに、幾つかの職場を渡り歩いて、現在はNHKに勤務して音楽制作に携わっている。滅多なことではお目にかかれない英才たちと、直に触れ合えたことは、何より幸いなことだった。本稿では、私が音楽へ向かうことになる経緯を、手を差し伸べて下さった人たちや、演者たちとの思い出に絡めて綴ってみたいと思う。

空に星があるように

「空に星があるように」(作詞・作曲／荒木一郎)。この曲は、私が音楽の道に進みたいと思う切っ掛けとなった歌だ。1966年の春、東海ラジオで始まった「星に唄おう」という番組のテーマ曲だった。

私がそれまで聴いてきた日本の歌曲とは全く違う味わいを持った曲で、創作音楽の世界へ駆り立てられた一曲

む思いで応じた。

1973年2月、入社試験当日。想像を遙かに超える500名近い応募者がいた。ペーパー試験に不安を抱えたまま試験に臨んだが、案の定、数学で躓き、暗い気持ちで面接に臨むが、M氏から「うーん！」と唸られる始末。何も言えず目礼して終わった。翌日、親に留年の許しを乞いに帰省。快い返事などあるはずもなく数日が経ったところで、トリオから起死回生の内定通知が届き、入社が決定した。

その年の4月にトリオレコードに入社した私は、新人アイドル歌手の宣伝担当を命ぜられ、8か月間2枚のレコードを担当した。が、結果は惨憺たるもの、プロジェクトは解散し、そのジャンルからの撤退が決まった。

そして、その年の12月に荒木一郎が移籍し、私が担当となった。「空に星があるように」から8年。ラジオを聴きながら見た夢が叶った瞬間だった。その後、木の実ナナ、岩城滉一などを担当したが、木の実ナナのプロデューサーI氏の渡辺プロダクション退社に併せて、私も少し遅れて退社し、I氏と行動を共にすることにした。

音楽著作権にかかわる大事件

1979年6月、I氏が設立したアトリエ・ダンカン



●いちょか・じゅんじ
松川町出身。レコード会社、音楽出版社を経て現在NHKに勤務。音楽に関わる著作権管理、CD、番組などの音楽制作を続けている。趣味はゴルフ。還暦の時にHCP73を取得し、現在に至る。

となった。その年の9月にビクターから発売され、荒木一郎は第8回日本レコード大賞新人賞を受賞した。翌年には「今夜は踊ろう」「いとしのマックス」などを立て続けにヒットさせた。

荒木一郎の担当になる

2浪の末に大学へ進学したものの、年下の同級生と馴染めず、次第に学校から足が遠いた。一念発起し、自らの手で、道を切り開こうと友人の伝手で、コロムビアレコードでアルバイトを始めて3年目。当然ながら入社を目論んだが、経営上の理由で、その年の採用が見送られ、コロムビアへの道は閉ざされた。暗澹たる気持ちで過ごしていると、バイト先の上長から元コロムビアの名物プロデューサーM氏を紹介された。トリオレコードが補充の採用を考えているが試験を受けてみないかと誘われ、藁をも掴

に合流した。所属は木の実ナナだけでスタートしたダンカンだったが、後から、根津甚八、森下愛子、上條恒彦が移籍。スタッフの関係で、3人が私の担当となった。加えて、金子由香利、小堺一機などのステージ制作も



金子由香利さん(右端)と公園通りのシャンソニエで打ち合わせ(左から2人目が筆者)

並行して行うことになり、この時期が生涯で最も繁忙を極めた。

そんな時に、金子由香利にCMの企画が舞い込み、ビッグビジネスの予感にいち早く反応して、引き受けてしまった。内容は、「ある愛の詩」「白い恋人たち」などの作曲家として有名なフランシス・レイに作品を委嘱し、CMを制作するというものだった。日本におけるCM放送に関しては、音楽著作権使用料が免除される特例があることから、私も広告代理店のクリエイティブも、外国作品であっても、国内と同様に取り扱われるものと信じて制作をすすめた。作曲家サイドも、1年間の著作権使用の免除を快く了解していた。音楽著作権とは、作詞家や作曲家が自分の音楽の利用を許諾できる権利だ。許諾される場合、使用料が発生

する。

ところが、日本で録音を行い、放送が開始されて間もなく、J A S S R A C（一般社団法人日本音楽著作権協会）から、フランスの作品は、フランスの著作権管理団体との国際相互管理契約があるため、C Mの使用料免除は認められないと告げられて、通常の放送使用料が請求されることになった。その金額を聞いて愕然としたが、後の祭り。当然、使用料の支払いについて、代理店と紛糾したが、ありがたいことに神風が吹いた。本来なら代理店側に立って私を糾弾するはずの、代理店の著作権管理の代表が、「プロたる者がこんな体たらくでどうする、得意先に顔向けできなくなるぞ」と、営業担当に向かって一喝。最終的に、元請けである

広告代理店が使用料の立替えをし、私が、作曲家サイドとの戻し入れ交渉をすることで決着し、必要なを得たのだった。



根津甚八さん(右)と映画「影武者」の打ち合わせ。新宿歌舞伎町にて



「忍たま乱太郎」1周年パーティーで、原作者の
尼子騒兵衛さん(中央)と(右が筆者)

ら企画提案した「忍たま乱太郎」(NHK Eテレで放送中)が採択され、今年25周年を迎えた。作曲家の馬飼野康二氏から原作を預かり、生まれて初めて書いた企画書が採択されたのだ。私にとっては奇跡のアニメーションである。主題歌の「勇氣100%」は、光GENJIに始まり現在まで7組のアーティストによって歌い継がれて、今も広く親しまれている。私が放送で成し遂げてみたかった音楽とのコラボレーションが初めて成功したケースとなった。

この先も音楽に関わっていく

その後、NHKの関連団体である、NHK出版音楽出版部へ移籍することになった。音楽出版部は、NHKの番組音楽の作詞家・作曲家と著作権契約を取り交わし、放送、CD、CDレンタル、ゲーム、ビデオ、カラオケ、における楽曲使用について、著作権管理を行うNHKの

なった。レコードセールスを、これまでのように人海戦術に頼っていたのは、それ以上の発展は見込めないのではないかと思うようになり、レコードを単体で考えるのではなく、放送を基軸として、音楽を考え直してみたいと思うようになっていた。

音楽とアニメのコラボレーションが成功!

アトリエ・ダンカンの仕事が繁忙を極めていたときに、NHKと電通がソフト制作会社をスタートさせるらしいとの情報を得た。放送と音楽を融合させることができればと考えていた私は、何とかそのプロジェクトに加わりたいと勝手に想いを巡らせていた。そんなとき、たまたま知り合いがその新会社になりに大きく関わっていることを知って、私のイメージする放送と音楽の話を知ってもらった。すると、先方から具体的に話を聞きたいと連絡があり、裏付けなど全くない「タラバ」の話でよければと念押しして面会した。

それから半年後、私は、ダンカンを退社し、NHKエンタープライズと電通が設立した総合ビジョンに移籍。そして、総合音楽出版を立ち上げ、NHKの番組音楽を制作することになった。NHKスペシャルなどを手掛けながら、アニメーションの音楽制作を始め、1993年には、自

唯一の部署であった。そのことから、総合ビジョンの、音楽出版事業への進出は、当初から、歓迎すべからぬ事態と捉えられ、良好な関係ではなかった。が、あるドラマ番組の著作権管理をめぐって、課題が提起され、NHKの番組音楽の著作権管理のあり方が見直されることになった。それを契機に、NHK出版が著作権管理業務を拡充することになり、ライバル関係にあった私にもNHKの事情を知る同業者として声が掛かり、総合ビジョンも了解し、総合音楽出版を畳む形で、NHK出版へ移籍することになったのである。以来、20年間、NHKの番組音楽の制作と著作権管理に携わり、1万曲以上の作品の著作権を管理している。

私が関わった番組の中で、「プロジェクトX 挑戦者たち『地上の星』(作詞・作曲/中島みゆき)」「おかあさんといっしょ『だんご3兄弟』(作詞/佐藤雅彦・内野真澄 作曲/内野真澄・堀江由朗)」は、番組が生み出した作品として広く知られ、今もなお、いろいろなアーティストによってカバーされる不朽の名作となっている。

そして、現在は、NHKの音響デザイン部という音楽制作の現場でディレクターとして後進の指導に当たっている。かつて、いつかは、あの場所に立ってみたいと考えていたその場所で、携わりたいと思っていた仕事に関わり、若者と一緒に音楽を語れる幸せを噛み締めている。